

倭訓栞の清濁

平井 吾門

○ はじめに

伊勢の国学者・谷川士清（一七〇九～一七七六）によって編纂が始められた倭訓栞は、前編・中編・後編に分かれる全九三巻八二冊の大著であり、最終巻の刊行までに一一〇年の時を要した国語辞書である。士清が没した翌年から前編の一部刊行が始まったが、前編の巻一三までは士清の手によるものである可能性が高いと考えられる一方、それ以降の巻は子孫や弟子、加茂季鷹（一七五四～一八五一）ら交流のあった人々の手が少なからず入っていることが知られている。

従来、「江戸中期においては」という但し書きが付されつつも、倭訓栞は近代国語辞書の嚆矢として高い評価を得てきた。そして、活字化や復刻などを経て、今なお広く利用されている。その一方で、使用実態に比して、その研究は未だ基礎的な段階にあると言って良い。

筆者はこれまでに、初期稿本と目される自筆本倭訓栞には、「見出し語（仮名表記）—漢字表記」という体裁のみの項目が多く見られ、完成品と言える整版本倭訓栞でもそれが散見されることなどから、倭訓栞は漢字表記と和訓との対応を第一義として編纂が開始された辞書である可能性が高いことを述べた（平井二〇二一aほか）。また、排列や増補に着目し、倭訓栞が当初目指したものは、見出し語に二万語前後を収める整版本の規模に比べて、相当小型なもの（自筆本野線部分に当たる三千語程度）を想定していた可能性を示した（平井二〇二一）。

すなわち、倭訓栞は、編纂が進むにつれて語彙や語釈が拡充されたことで大型化し、最終的には右のような高評価を得るに至ったが、起稿当初に士清が目指した方向性は、整版本の様相とは異なるものであった可能性が高いと考えらる。

本稿では、倭訓栞の成立過程に関心を抱く立場から、見出し語における清濁が変遷する様子を追う。特に、自筆本と整

版本との比較を通じて、清濁に対する谷川士清の意識の変化や編纂過程の実態を考察する(註二)。また、従来指摘されてきた本居宣長との関連についても具体的に触れることにしたい。延いては、倭訓栞再評価のための基礎拡充を図るものである。

一 先行研究

従来、倭訓栞の清濁について、具体的に濁音研究史の資料としての価値はどのようなものであるのか、その実態は解明されてこなかった。結果として言及に値しなかった可能性もあり得るが、倭訓栞研究の立場からは明らかにしておきたい課題である。

倭訓栞が、近代以降に成立した国語辞書にも大きな影響を与えたことは先行研究により指摘されてきたが、倭訓栞の清濁に関する本格的な考察は、管見の限り行われていない。ただし、三澤(二〇〇八)の中で、自筆本と整版本の見出し語の比較が試みられている。同書では、自筆本に掲載される全見出し項目の索引を示すとともに、各々が整版本ではどのように表記されているかを示している(整版本では除かれている項目もある)。清濁に関する統一的な考察も併せて望まれるものである。

なお、近世・近代において、倭訓栞を清濁判定の典拠とし

て掲げる資料が登場している。著名なところでは、「俚言集覧」が倭訓栞を典拠の一つとして挙げ、清濁で対立する語を別語として掲載する。また、濁音を含む語を列挙した書である「濁語考」(清水浜臣著・岡本保孝編、文政一〇年の奥書)でも、典拠として倭訓栞の名が挙がる。その一部に倭訓栞における所在も記載され、それにより整版本倭訓栞が参照されていることが分かる。

なお、自筆本倭訓栞は野線で三つに仕切られた用箋を用いており、その三つの部分を野線部・上段部・余白部とする(三澤二〇〇八を踏襲、次図参照)。

あしのみやまやまの丸屋 世もろはる金次第を あそびにこしてへたなほ	魚い魚えたり魚屋らくは筆頭を移り たるなほし	あそびよし 奈良の枕持たにへり馬 飛に細音吉と書り袖中抄にもむかし	奈良坂に寄土ありと畫家の丹青に用る	よし見えたりには土はたとよめはその略也 あらかね 沓の器中の様をいへり	よて飛空士と旗けり見益に對す	あしを 日本花に錦をよみ後名抄に 翠をよみり足緒の巻也	あしを 鶴屋等に著し錦をいす	長屋高竹に風えたり是は足付掃の巻也	あそびの巻 御田原の巻にありし巻目 あそびの巻 御田原の巻にありし巻目	あそびの巻 御田原の巻にありし巻目 あそびの巻 御田原の巻にありし巻目	あそびの巻 御田原の巻にありし巻目 あそびの巻 御田原の巻にありし巻目
---	---------------------------	--------------------------------------	-------------------	--	----------------	--------------------------------	----------------	-------------------	--	--	--

【巻一・二八ウの図】

これまでの研究で、三つの部分には原則的に先後関係のあ
ることが分かっており、野線部↓余白部↓上段部の順に成立
している。また、さらに後の記述と見られる野線欄外への記
述なども少量ながら指摘でき、自筆本の中でも編纂過程の通
時の変化を観察することが可能であることが分かっている。

二 谷川士清と濁音

そもそも、倭訓栞の編者である谷川士清が、日本語の清濁
に関してどのような知見を有していたのか確認したい。

初期稿本である自筆本「倭訓栞」では、巻一冒頭に置かれ
た「総論」の中で、清濁に関する以下の記述が見られる。

まず、

①和語清濁通用するもの多し(一才野線部)

②歌に清濁をかよはせるは万葉にいふかしを言借と書
えやはいぶきのさしも草又玉だれの見すはこひしとお
もはましやは白川のみつはくむまでとつづけたる類是
也(一才上段部)

③漢字をもて倭語を記せし古書日本紀古事記等は皆清
濁を分てり倭名抄に至てはやゝ清濁を通し用ひたりそ
れよりおちつかたは一に混しぬ(五ウ野線部)

と述べ、和語においては清濁の対立がある語を通用してきた
と指摘し、掛詞として和歌に用いられる例を挙げる。また、

上代の散文資料では清濁を書き分けていたが、倭名抄では混
同が生じているとの認識を示す。

そして、

④半濁には一圏し濁音には二點するを俗ににこりをさ
すといふ……かさは四つの行に濁音あり余りはなし

(四才野線部)

として、半濁点・濁点を用いた表記法と、カ・サ・タ・ハ行
に濁音があることを述べる。濁音が四行にわたるといふ記述
は、倭訓栞以前に漢文で執筆された随筆「鋸屑譚」(士清自
筆本)においても見られる。また同書では、「阿久(濁)良」
(二三ウ)や「阿牟太(濁)」(一九才)のように、濁点を万
葉仮名に付す体裁を随所に用いている。

さらに、倭訓栞総論では、次のように「連声」を扱ってい
る。

⑤又連声ありよみつゞきにて音を変する也南山変化を
なんざんへんぐゑとはぬる音の文字の下は清なれと濁
るなり葛伯一品をかつばくいつぼんとつむる音の下に
ては半濁となる也といへり(六才野線部)

ここでは、連声という名称でいわゆる連濁について指摘する
が、また、漢語の例のみが挙げられており、和語の連濁現象
についてはどのように考えていたのか、明確な記述はない。

その他、田舎言葉に濁音が多い旨も指摘する。

⑥田舎の詞には濁音多しよて世諺にびるばちどんぼう

がにがへるといへる(七ウ野線部)

これらの記述からは、濁音というものを音声学的にどのようなものとして捉えていたのかは判然としないものの、土清は国語における清濁の対立を自明のものとして捉えているようである。そして、倭訓栞起稿当初から清濁への強い意識を持ち、倭名抄よりも前の資料に正確な清濁の書き分けの典拠を求めていたことが窺われる。

特に①は、総論の冒頭に置かれる文言であり、土清が総論を著すにあたって、清濁の通用が大きな関心事であったことを表している。なお、この記述は、次で示す様に整版本では後方に回されている。

次に、整版本倭訓栞前編の巻一に置かれた「凡例・大綱」の中で、清濁に関する記述を確認する。

①日本紀古事記及令式等は皆清濁を分てり倭名抄に至てはや、清濁を通し用ゐたりそれよりおちつかたはもとよりいふにたらず(六ウ)

②倭語に清濁通用するもの多し(一六ウ)

などのように、自筆本の記述は全て取り込まれつつ、全一八項目に亘つて清濁への言及が見られる。依然として、清濁が重要課題であり、辞書の冒頭に掲げるべき問題として捉えていたことを印象づけている。

新たに追加された記述としては、次のようなものがある。

③倭語清濁によりて氷炭相反するものありたとへはみしは見き也しときと通へりしを濁れは不見也……又本濁あり新濁あり本濁はもとより濁るへきをいふ也新濁ハ音便によりて濁る事あるをいふ也(一六ウ)

④大よそ倭語の發聲に濁音なし其たま、濁音に唱ふる嶽をだけとし寄店虫をがうなとするか如きは皆後世轉訛のいたす所なるべし(一七ウ)

⑤しちすつの濁音紛れ易し古例と訓義とを辨て書へし妄にすべからず(三〇ウ)

⑥なにぬねのたちつてとの二行に連聲あり連聲といふはよみつゞぎにて音を變する也……又南山變化をなんざんへんぐゑとはぬる音の文字の下は清るも濁音となり葛伯一品をかっぱくいづぱんとつむる音の下にては半濁と成なりといへり(三七ウ)

⑦讀書口語ともに漢吳は勿論清濁も音便の宜しきに從ふへし假令は儒道佛道るときは道の字濁音也神道の時は道の字清音也(四〇ウ)

整版本では、清濁に関する記述が増加しているものの、自筆本同様に、和語に関しては上代の資料を中心として清濁の判断を下そうとしていたようである。倭訓栞は、全体を通して倭名抄を典拠として大いに参考に行っているが、倭名抄の清濁にも揺れがあることから、その扱いは苦勞したことが推察される。

ここで注目される点は、③和語の項目に「本濁新濁」の用語が追加される他、④「和語の語頭に濁音がない」⑤「四つ仮名が紛れやすい」といったことを指摘していることである。

倭訓栞の大綱は、「この大部な辞書を支える原理として統一性を欠き、理論的にも脆弱で、独自の価値は認められないというのが率直な結論である」(尾崎一九八四)などと評価され、土清自身のオリジナリテイには欠けるものであるかも知れないが、和歌や中古以降の資料における清濁の通用・乱れを前に、記紀などの上代資料に清濁の規範を求める姿勢を保っている。

ただし、倭訓栞には、自筆本の段階から様々な時代・位相の語が含まれており、決して古語辞典の編纂を目指していたわけではないことは明らかである。そのことは、総論にも「日本書紀より後の世の言葉は倭訓栞に詳述した」という旨が述べられており、編纂当時(近世中期)の国語をそのまま表しているところがあると考えられる。

また、⑥の連声とは別に項目を立て、和語の解説を行う項目に本濁・新濁の解説を組み込んでいる。このことから分かるように、濁音の発生についてはもともと「濁る語」があったことを示し、連声・連濁によって新たに濁音が生じた語があった、という立場を明確に示すようになってきている。

なお、土清の他の著作でも、清濁への言及が見られる。晩年に「大日本史」への批評を記した「読大日本史私記」(一

七七四)では、次のような記述が見られる。

契 スミテヨムヘシ (二二二下表)

「読大日本史私記」は大日本史への論難の書であり、先人が契字にチギルと濁音の読みを付したのに対して、「チギル」と清音で読むべきことを示した箇所と考えられる。晩年、整版本倭訓栞を編纂している最中の土清にとって、清濁の判定が大きな関心事であったことが分かるのである。

三 倭訓栞の清濁

さて、倭訓栞の清濁書き分けの状況を確認する。

そもそも倭訓栞では、自筆本・整版本ともに、以下のように同音異義語を「○」記号で分割しながら、同一項目内に収めている。

きる 斬字をよむは刃をきといへるより出たり○服字をよむは衣をきぬといふより出たり(自筆本巻二・五)

三才

このような体裁の中で、「あか、あが」「あじか、あしか」

「かき、かぎ」のように、清濁で対立する語が、自筆本・整版本ともに別項目として立項されている点を指摘できる。自筆本では排列が整っていないが、整版本では第二音節まで五十音順に並べられているため、これらの項目は概して並記されることになり、別語であるという認識が視覚的にも明確に

伝わる。

見出しでは濁点が付されていて、語釈に關してみると、次の例のように必ずしも清濁が書き分けられているわけではない。

あばら 物のすきまあるをあばらといふあばら骨など
もいへり……(自筆本巻一・一七ウ)

なお、自筆本には、以下のような記述が見られる。

いかた 鋸をよめり鑄型の義也○いかたは筏をいふ
(巻一・四四オ野線部)

この記述では、「いかた」「いかだ」という清濁の異なる語が同一項目に纏められているが、整版本では、別項目として立項されることになる。

つまり自筆本では、清濁の異同を以て別語と認定し、別語として立項する場合もある一方で、別語との認識はありながらも同一項目に纏める場合があったことになる。このことはすなわち、自筆本倭訓栞の編纂方針が一定していなかったこととの証左になろう。そして自筆本の見出し項目の排列に關して、「第二音節までの五十音順に排列した」という総論の記述と実際とは異なっているのと同様、自筆本本文部は見切り発車的に完成とされたことが窺える(排列については平井二〇一一参照)。一方の整版本では、後述の通り、清濁の異同は別語として立項する厳密な基準となっているようである(排列も、凡例に示される通り第二音節までの五十音順となる)。

三一 自筆本と整版本の比較

ここで、語の清濁に着目して自筆本と整版本とを比較する(「/」は自筆本と整版本の仕切り。「・」は整版本で項目が分かれることを示す)。整版本の前編巻一三(「そ」部)までは、後人の手が入らずに谷川士清の意図が十分に反映されているものとする立場から、「あくそ」部までの比較を原則とする。

自筆本の「あくそ」部の項目数は二三八七あり、そのうち四二九例で整版本前編と比較することが出来る。その中で、自筆本から整版本へと編纂が進むことで清濁が変更されているものが以下の計一一三例ある(所在は自筆本についてのみ示す)〔注二〕。

①自筆本(濁)↓整版本(清) 二二例
あぶご/あぶこ(二・二四オ余白部)、いが/いが(一・四三オ野線部)、いざ/いさ(一・四六オ野線部)、かけぢ/かけち(二・三四オ野線部)、かぢ/かち(二・三五ウ野線部)、かみなつき/かみなつき(二・三三ウ野線部)、くらぶる/くらふる(二・六四オ野線部)、くれぐ/くれく(二・六六オ野線部)、五八オ上段部)、くれぐ/くれく(二・六六オ野線部)、こがらし/こからし(三・一七ウ野線部)、こそ/こそ(三・九ウ野線部)、さぐなみ/さぐなみ(三・二七ウ野線部)、さぐめ(ごと)さぐめ(ごと)(三・二九ウ余白部)、さぐれいし/

さしれいし(三・二七オ野線部)、さしもぐさ/さしもぐさ
(三・三二オ余白部)、さなぎ/さなぎ(三・三〇ウ余白部)、
しどだち/しどだち(三・四七オ野線部)、せがれ/せがれ
(四・三ウ野線部)、そこばく/そこばく(四・一〇オ野線部)、
ぞめき/ぞめき(四・六ウ野線部)、そよぐ/そよぐ(四・九
ウ余白部)、ぞり/ぞり(四・二ウ野線部)

②自筆本(清) ↓ 整版本(濁) 九一例

あかほし/あかほし(二・二二ウ余白部)、あかれ/あがれ
(一・一八オ余白部)、あきと/あき(二・二七オ上段部)、
あきとふ/あきとふ(二・二七オ野線部)、あけほの/あけ
ほの(二・二七オ野線部)、あさやか/あさやか(二・一九ウ
余白部)、あちきなし/あちきなし(二・二四オ野線部)、あ
はき/あはき(二・二四ウ野線部)、あはたこ/あはたこ(二
・二六ウ野線部)、あまのたくなは/あまのたくなは(二・二
六オ野線部)、あらゝき/あらゝき(二・二九オ野線部)、あ
られはしり/あらればしり(二・一八オ上段部)、ありなれ
かは/ありなれがは(二・二六ウ野線部)、あをうなはら/
あをうなはら(二・三〇ウ野線部)、いかた/いかた・いか
だ(二・四四オ野線部)、いからし/いからし(二・四三ウ余
白部)、いかるか/いかるが(二・四三ウ野線部)、いきとほ
り/いきとほり(二・四九ウ野線部)、いさきよし/いさき
よし(二・四七オ野線部)、いさらみつ/いさらみつ(二・三

六ウ野線部)、いしはし/いしばし(二・四九ウ野線部)、い
すゝき/いすゞき(一・五五ウ野線部)、いするこふ/い
するごひ(二・五〇オ野線部)、いそく/いそぐ(二・四六オ
野線部)、いたゞきもちひ/いたゞきもちひ(二・四五ウ余白
部)、いたやくし/いたやくし(二・四六オ野線部)、いちし
るし/いちじるし(二・三八ウ野線部)、いちはやひ/いち
はやび(二・四二オ上段部)、いづれ/いづれ(二・四七ウ上
段部)、いなひかり/いなびかり(二・三七オ野線部)、いは
とかしは/いはとがしは(二・五二オ野線部)、いへとも/
いへども(二・四一オ野線部)、いへはと/いへばと(五・三
七ウ上段部)、いめひと/いめびと(二・五三ウ野線部)、い
りほか/いりほか(二・五一ウ野線部)、うたかた/うたが
た(二・二ウ野線部)、うつくまる/うづくまる(二・八オ野
線部)、うつなひ/うづなひ(二・四オ野線部)、うつほ/う
つほ・うつぼ(二・八ウ野線部)、うのはなくたし/うのは
なくだし(二・二ウ野線部)、うまひと/うまびと(二・六
ウ上段部)、うむかしみ/うむがしみ(二・八オ野線部)、え
たち/えたち(二・四オ野線部)、おきぬふ/をぎぬふ(二
・二一ウ野線部)、をくな/をぐな(二・一九ウ野線部)、を
くるまのにしき/をぐるまのにしき(二・二五ウ野線部)、
をたまき/をだまき(二・二〇オ余白部)、かくのみ/かぐ
のみ(二・三五オ野線部)、かしはなかし/かしはながし(二
・三六オ上段部)、かせつゑ/かせづゑ(二・三七オ野線部)、

かそ／かぞ(二・三五ウ余白部)、かたゝかひ／かたゝがひ(二・三九オ野線部)、かたひら／かたびら(二・四一オ野線部)、かて／かて／がて(二・三〇ウ野線部)、かてら／がてら(二・三〇ウ上段部)、かならず／かならず(二・四五オ余白部)、かのにげくさ／かのにげく(半濁)さ(二・三八ウ野線部)、かまほこ／かまほこ(二・四一ウ上段部)、かみなひ／かみなび(二・四五オ野線部)、からをき／からをぎ(二・四七オ余白部)、かんだち／かんだち(二・三三ウ野線部)、かんどき／かんどき(二・三三オ野線部)、きそ／きぞ(二・五一オ野線部)、きぬ／きぬ(二・五一オ野線部)、くほし／くほし(二・六一ウ野線部)、くめちのはし／くめちのはし(二・六八ウ野線部)、くろきあかき／くろぎあかぎ(二・六二オ野線部)、こいまろひ／こひまろび(三・一一オ野線部)、こちたみ／こちだみ(三・九オ野線部)、こつまかき／こつまがき(三・一二ウ野線部)、ことたま／ことだま(三・一四ウ野線部)、こと／こと／こと／こと／こと／こと／こと(三・一一オ野線部)、ことなし／ことなし(三・一一オ野線部)、さいくさ／さいぐさ(三・二九ウ野線部)、さいたて／さいだて(三・二九ウ野線部)、さいつころ／さいつころ(三・二九ウ野線部)、さかにくき／さがにくき(三・三七オ上段部)、さかほかひ／さかほかひ(三・三〇オ野線部)、さしは／さしは(三・三二ウ野線部)、さながら／さながら(三・二六ウ上段部)、さやけり／さやげり(三・三三オ野線部)、しかす

かに／しかすがに(三・四五オ余白部)、しかのみならず／しかのみならず(三・四四ウ上段部)、しゝくしろ／しゝくしろ(三・四四ウ上段部)、したなか／したなが(三・四三オ上段部)、しどけなき／しどけなし(三・四四オ野線部)、しひら／しびら(三・四七ウ野線部)、しるしのすき／しるしのすき(三・三九ウ余白部)、すさぶ／すさぶ(三・五六ウ上段部)、すへらぎ／すべらぎ(三・五七ウ上段部)、せんすべしらす／せんすべしらす(四・二オ野線部)

さらに、各見出しを語種(和語・漢語・その他)で分類すると、全一四二九例中、和語が一三九五例、漢語が二九例、その他が五例となる。それぞれの語種で、自筆本と整版本の清濁の相違を比較すると、異同は以下のように分布する。

和語 一三九五例中 一一二例
漢語 二九例中 〇例

その他 五例中 一例(ありなれかは)すなわち、倭訓栞では、和語の清濁が大きな問題となる一方、他の語種(特に漢語)に関しては、一例の変更も見られないことになる。この点は、土清の見識を示す大きな指標となろう。

以下、和語と、和語および朝鮮語との混種語と言える「ありなれかは」の例を考察する。

まず、①自筆本(濁)↓整版本(清)に関して考察すると、

用例は少ないながらも「古代語の用例に準拠させる」「濁音の連続を廢する」「和語の語頭にある濁音は清音に直す」という点を指摘できる。

あぶ／あぶ(一・二四才余白部)

しどだち／しどだち(三・四七才野線部)

ぞめき／ぞめき(四・六ウ野線部)

ぞり／そり(四・二ウ野線部)

「あぶ」「は」、中世までは清音「あぶ」「は」であった語として知られている(日葡辞書など参照)。「しどだち」「は」「章(しど) + 断つ」という解釈が為されているが、整版本では後者の連續を残しつつ「しど + 断つ」と変化させている^{三三〇}。

一方、②自筆本(清)↓整版本(濁)を見ると、「連續の生じる箇所を濁音に直す」という操作の多いことが分かる。九一例中二六例において、連續による濁音化が生じている。さらに、土清は語釈に於いて

いびき 軒をいふ息引の義也(自筆本卷一・五〇才野

線部)

のような、「漢字分解」型の語源説を示すことが多いのであるが、この形に分解して考えた時、後項とされる語の語頭が濁音に変化している例も含めると、四五例に及ぶ。これは、整版本の大綱で「新濁」として言及する連續現象について、後述のように本居宣長との交流の中で知見を深め、清濁判定

の大きな材料としていた可能性も否定できない。

また、孤例ではあるが整版本で「かのにげく(半濁)さ」と表示される例がある。この「く(半濁)」「は、鼻濁音を示す記号とも考えられるが、「さいぐさ」のように通常の濁音表記をするものもあるため、誤植と見るのが適当であろう。しかし、あるいは本濁「げ」・新濁「ぐ」の差を示す試みという可能性もあり注意が必要である。

「せんすべしらす／せんすべしらす」の例では、否定の「ず」を濁音表記に直しており、より清濁表記に正確を期すようになった姿勢が窺える。そもそも、整版本・自筆本ともに語釈では、「非ず」を「あらず」と表記するなど、濁点は厳密に付されてはいない。翻って、少なくとも見出し語に関しては、清濁を厳密に書き分ける態度を取り、濁音符の無いものは「清濁不明」ではなく、清音として読まれた蓋然性が高いと言えるのではないか。

全体として見れば、自筆本(清)↓整版本(濁)の量が四倍以上もあり、自筆本では濁音の判定が推敲段階にあったことを窺わせる。そして、整版本に至るまでに個々の例をより詳しく考察したのであろう。

特に、「くれぐ／くれぐ」「きぬぐ／きぬぐ」のように、自筆本から整版本へと編纂が進む中で真逆に位置する判定を行っていることは、何らかの基準を以て個々に吟味を

深めた結果と言える。

三―二 自筆本増補部分の検討

さて、先に述べたように、自筆本では本文と増補部分とで先後関係が認められるため、各々の箇所で濁点が付される状況はどのようなものであるのか確認したい。

自筆本には、「あかほし」という語が二回現れる。

あかほし 歌によめり倭名抄に明星をよめり(巻一・

二二ウ余白部)

あかぼし 啓明をいふ神楽歌にもよめり暁の明星也

(巻一・一七ウ上段部)

清音表記の前者は胡粉により抹消されているほか、それぞれ見出し語の下に朱筆で「上」「下」の小書きがある。結果としては、後者の濁音表記が残存したことになり、整版本でも濁音表記を踏襲しつつ、以下のように両者を融合した語釈がベースとなっている。

あかぼし 啓明をいふ暁の明星也神楽歌にもよめり倭

名抄に明星を訓す即ち歳星也(巻二・六ウ)

倭名抄^{〔註四〕}の記載は「阿加保之」であり、ここから積極的に清濁を知ることとは出来ない。士清は、自筆本余白部から上段部へと編纂を進める中で、何らかの知見を得て清濁を改めたものと思われる。

「いさらみつ／いさらみづ」(巻一・三六ウ野線部)の例で

は、「水」を表す仮名を「みづ」から「みづ」へと直している。自筆本では、「みづ 水をいふ」という項目が余白部(巻六・二三ウ)に立項されており、「い」部の野線部にある「いさりみつ」が成立した後に、「み」部余白部に「みづ」を立項し、整版本へと続く流れの中で「みづは元来濁るものであり、いさりみつのつも濁るべき」と考えるに至ったのである。

また、自筆本上段部に見られる

さぐる 探をよめり狭彫也(巻三・二六ウ)

の例では、「ぐ」に付された濁点が墨の様子から後に付されたものと推測される。整版本では中編に「さぐる」として立項されているが、上段部に増補した後、さらに推敲を加えて濁点を付した様子が分かる。

四 本居宣長の影響

ここで、士清が編纂を進めるにあたって清濁に関する知見を深めた原因を、本居宣長(一七三〇〜一八〇一)との交流に求めることを考える。

士清と宣長は書簡を通じて交流を深め、倭訓栞および古事記伝というそれぞれの代表的著作を、草稿段階から相互に関連し合っていた事が知られている^{〔註五〕}。しかし、士清は草稿の多くを埋納したとされ、宣長が書き込みを加えたと思わ

れる倭訓葉稿本は現在知られていない。書簡にも、閲読内容の具体的な記述は多くないことから、宣長が倭訓葉の草稿段階にどのような影響を加えたのか、その詳細は明らかとなっていない。

そもそも本居宣長は、国語の清濁に高い見識を持ち、その著作でも積極的に解説を加えている（古事記伝を含めた一部の著作は刊行前に土清は目していることが知られる）。

古事記伝の中では、

此の記また書紀万葉は、分けて用ひたる中に、此の記は殊に正しければ、厳かにその清濁を守りて読むべし。一つといへども、私に輒く変へ読むべきにあらず。（巻一・一一頁）

などと述べ、古事記の清濁が厳密であることを主張する。或いは玉勝間の中では、

さてそのすみにごり、今の世にいふとは、ことなるも多きを、人皆、通はし書たりと思ひ、あるは混ひたる也と思ひ、あるは濁る音には、清音の字をも書る例也、など思ひをるは、くはしからざる也、さらにざる事にはあらず、古へと今と、いふ言の清濁のかはれる也（巻四・一四三頁）

と述べるなど、和語の清濁に関しては強い意識を持ち、世の過ちを正したいと自覚していたことが分かる。このような態度の宣長と学問的交流を持つことによって、土清は清濁につ

いても大きな示唆を受けていたと思われる。

倭訓葉の内容に関して交わした書簡の中では、以下のような記述が見られる（明和八年某月某日、土清から宣長への書簡）。

イブカシノ事サモアルベキニヤ。当時ニテハイブカシ、オホ、シナド、フ、ホヲ清テハ通ジ難ク覚ユ。コハ伊ノ部於ノ部ニテ説ヲ立ベクコソ。（本居宣長全集一別巻三、三九八頁）

これは、「いぶかし」「おほし」という語に関する項目について、宣長が意見したもののへの返答であろう。実際にいぶかし、おほしに関わる項目を以下に示す。

いぶり 神代紀に安忍字をよめり心つよくなさけなきをいふ俗にすねたる氣象ある人をいぶりといふも意通へり○萬葉集に憐悒をいぶかしともいぶせしともよめり俗に蚊遣火をかいぶしといひ薪のふすほりてもえぬをいぶるといふ（自筆本巻一・四九オ）

いぶかる 訝字をよめりいぶかしと義通ふなるへし（自筆本巻一・四九オ）

いぶり（整版本） 神代紀に安忍字をよめり心つよくなさけなきをいふ廣韻に忍安不仁曰忍と見ゆ俗にすねたる氣象の人をいふも意通へりいなぶりの義成へしいぶかし（整版本） 萬葉集に憐悒をよめり今人不審

をよめり蚊遣火をかいぶしといひ薪のふすほりてもえぬをいぶるといへりいぶは氣吹の義かしは希ふ辞也

おぼつかなし 萬葉に鬱悒をよめり（自筆本卷七・五
五ウ）

おほし 上に同し（同）

※整版本には対応する語がない。

土清と宣長が著作を相互に添削し合う状況下、多くは稿本に直接疑義を書き込んだと見えて、宣長からの書簡にも具体的な指摘は見られないが、おそらく「いぶかし」「おほし」の清濁に関する指摘を受けたのであろう。自筆本「いぶかり」の語釈中に見られる「いぶかし」は濁音を含むが、「いぶかり」の項目では「いぶかし」の表記も見られる。その点について指摘を受けたのかも知れないが、整版本では当該箇所は無くなっている。

「おほし」については、万葉集（二四四九・三八九九）に「於保々思久・於煩保之久」などの表記が見られ、現行の辞書でも「おほほし」「おほほし」を共に掲げている（小学館日本国語大辞典第二版）。「古語大鑑」など。土清の返信からすると、「おほほし」として立項すべきという宣長の指摘があったのでは無いかと考えられるが、この項目も最終的に整版本には見られない。ただ、清濁に神経質な宣長から細か

く指摘を受けることで、土清が個々の清濁に再考を加えていたと考えるのが妥当であろう。

もつとも、清濁の問題に拘わらないが、宣長から出された疑問・訂正を全て反映しているわけでは無いようである。

次に枕詞である「あしひきの」の例について示す。「あしひきの」は、倭訓栞では自筆本・整版本ともに「あしびき」の項目で立項されている。宣長は、この言葉を玉勝間で敢えて取り上げて、

古へと今と、いふ言の清濁のかはれる也、然いふ故は、たとへば山の枕詞のあしひきのごとき、今はなべてひもじを濁りてよみならへれども、此仮字、古事記にも書紀にもいで、万葉にはことに多く見えたる、みな清音のかなをのみ用ひて、濁音を用ひたることなし、一つ二つにては、なほ混ひつるかの疑ひもあらむを、いとあまた見えたる、皆同じきをもて、いにしへは清つることをしるべし、

と述べているほどであり、倭訓栞の稿本を見た段階では、何かしらコメントを付けていたと考えるのが自然である。しかし、結局のところ整版本では「あしびき」が用いられており、土清のこだわりが見て取れる。

ただし、宣長も述べるとおり、上代においては「あしひきの」という形で用いられており、「あしびきの」の例が現れるのは平安以降として知られている（改訂版枕詞辞典）（同

成社、二〇一〇)など)。この点は、倭訓葉の編纂方針について、冒頭に掲げられた総論や大綱で述べられたものとは異なっている。特に、倭訓葉前編は、古語雅語を中心としていると記されているので、枕詞に関する清濁の態度は不審である〔注六〕。

五 まとめ

従来、倭訓葉は、近代的国語辞書の先駆けとして、その具体的な価値を検証しないままに評価が一人歩きしてきた嫌いがある。筆者は、国語辞書史上における倭訓葉の再評価を図るべく、基礎的なデータの拡充を重視してきた。

今回、倭訓葉の清濁を考察することで、再評価のための一つの糸口が見えたように感ぜられる。すなわち、個々の項目に細かく検証を重ねる土清の才覚を確認できたその一方で、国語辞書の要とも言うべき凡例(大綱)との乖離があるなど、清濁判定では自説に固執する姿も見られた。

倭訓葉編纂に大きな転機を与えたと考えられるのは、本居宣長とのやりとりである。二人の関係は、二〇歳ほど若い氣鋭の学者である宣長から、挑戦状とも取れる書簡を土清が受け取ったことから始まる〔注七〕。土清は、年齢差にも拘わらず、真摯かつ謙虚な態度で宣長を受け入れていた〔注八〕。その一方で、土清は、従前に身に付けた伝統的国学の立場から

脱することが出来ず、音韻論や文法論で画期的な成果を残した宣長の主張を、倭訓葉の中で完全に反映するには至らなかった〔注九〕。大著・日本書紀通証を完成させた土清にとつて、倭訓葉は、それまでの研究材料を基盤とした研究の集大成であったと考えられる。語釈や体裁の中に近代国語辞書に繋がる成果を残してはいるものの、総じて倭訓葉は、伝統的国学の立場に基づく前近代的な国語辞書であると言うことも出来るのではないか。

明治以降の研究では、倭訓葉を評価するに当たってとかく近代性がクローズアップされてきたが、そこにこそ倭訓葉の価値を見出そうとすれば、その論は不確かなものを含まざるを得ない。今、国語辞書史上に確かな足跡を残した倭訓葉について、近代性に囚われずその価値を再点検すべき段階にあると言えよう。

冒頭に述べたように、倭訓葉は自筆本と整版本とで大きく様子が異なる。自筆本は、規模も体裁も整っておらず、後世の規範となるに足る著作とは言えない。一方整版本は、①収録語彙数が多く、ジャンルも多岐にわたる(二万語程度)、②凡例や編纂方針を明示し体系立った排列をしている、③語釈が実証的であり妥当なものが多い、といった点から、比較的高い評価を得てきた(平井二〇一〇)。しかし、今回の調査から考えると、少なくとも清濁判定について、土清自ら示した編纂方針に従っていない場合がある。

士清は、国語の清濁が時代を経て変化してきたことは知っていた。倭訓栞が上代語の辞書であれば、上代資料に範を取り、逐一清濁を決定していったであろうし、そのことは総論や凡例に明示されたものと思われる。しかし倭訓栞には、上代以降近世に至るまでの多種多様な語が収録されており、時代によつて清濁が異なると考えられる語も多い。すなわち、倭訓栞に載せられた語の位相を士清がどのように捉えていたのかが大きな問題となるのであり、収録されたそれぞれの語の位相は語釈や所引資料との関連を精査して推定していく必要がある。その上で、士清が倭訓栞の編纂を進めた際に拠り所とした真の方針を明らかにしていかなければならない。

しかるに、現状で倭訓栞の意義を考えれば、必ずしも全ての点で本文の内容と編纂方針とが合致はしないものの、独自の規範で大規模な辞書の統一的な編纂を模索したその態度こそが、近世後期以降の国語辞書編纂に大きな影響を与えたものであるとの見通しが立つ。この点において、士清が大規模な国語辞書を志向するようになった過程を自筆本から整版本への流れに求めつつ、編纂方針と本文との乖離を確認し、「雅言集覧」を始めとする後続の国語辞書に与えた影響を総点検することを今後の課題としたい。

〔注一〕自筆本と整版本の間に位置する資料とされる清逸本倭訓栞に關しては、写本における濁点の有無という繊細な問題を孕んでいる

るものの、いずれ調査・比較を行い論の補強をしたい。併せて三澤薫生氏の一連の研究の成果にも注目したい。

〔注二〕自筆本には重複見出しがあり、整版本との比較でも重複して計測した。また、倭訓栞では、あ行の「お」とわ行の「を」が入れ替わった排列を採用している。

〔注三〕「よ」部に「よみぢがへり（開路還）」という項目がある。成立の下る後編ではあるが、「よみがへる」として組み込まれており、士清存命中に濁音の連続を嫌った可能性もある。

〔注四〕士清が参照した倭名抄は、典拠の所在を示した注記から寛文一二年版本と考えられている。

〔注五〕明和二（一七六五）年八月に初めて宣長からの書簡が届き、それ以降二人は交流を持ったという記録が残る。当初、宣長は士清の著作を論難する立場から「僕雖未與見其書而其為解也誤可知已」といった手厳しい書簡を送っている（『本居宣長全集』一七、三七頁）。それについて尾崎（一九八四）では、「和語を解釈するに当って、漢字を主としその和訓に拠つて説こうとする中世以降の伝統的な方法に対し、その誤りを鋭く指摘した。若き宣長の炯眼は流石である。士清は必ずしもその説に納得しなかったが、温厚、寛量で、包容力に富む彼は、徐々に国学の実証的自立的態度を撰取し、自らの学問を向上させたことは、その後の『栞』の内容をみれば推測されるのである。」としている。士清は、日本書紀通証を著した段階で実証的態度を示していることもあり、具体性を欠く評価ではあるが、倭訓栞成立に際して宣長の果たした意義が大きいことが述べられている。

〔注六〕自筆本の段階では前編中編後編などへの分割は考えられていなかったことが指摘されている(三澤二〇〇六)。

〔注七〕本稿七頁注を参照。

〔注八〕士清から宣長に宛てた書簡の中では、倭訓栞への添削の返答として、「ソノ音ノコト、御考説精き事ニ候まゝ書加へ候」「立之ノ高論敬服、大キナ粗忽也」などとして、自らの足りない面を素直に認めて宣長の説を受け入れたことを示す箇所がある一方、「対馬洲ノコト、会得イタサス」「難波津ノ歌ハ後人ノヨメルトノ義、御説御尤に被存候。されどこゝは小注の通りニいたし、ワニノ条下ニ其事ハ述申たく候」などとして、敬意を表しつつも、自説を継続させることが少なくないことが分かる(本居宣長全集 別巻三、三九九頁)。

〔注九〕「お」を「の」所屬もその一つである。

〈参考文献〉

大久保正・大野晋篇「本居宣長全集」(筑摩書房)

尾崎知光「和訓栞大綱」(勉誠社文庫二二二、一九八四)

肥爪周二「古典語の連濁」『古典語研究の焦点』、武蔵野書院、二〇一〇)

平井吾門『倭訓栞』研究の課題と展望」(日本語学論集六、二〇一〇)

平井吾門「谷川士清自筆本倭訓栞の掲出語の排列について」(日本語学論集七、二〇一一)

平井吾門「自筆本『倭訓栞』増補の展開について」(日本語学論集八、二〇一二a)

平井吾門「自筆本鋸屑譚の意義 倭訓栞研究の立場から」(訓点語と訓点資料二二八、二〇一二b)

三澤薫生「谷川士清自筆本『和訓栞』について」(和洋國文研究四一、二〇〇六)

三澤薫生「谷川士清自筆本倭訓栞影印・研究・索引」(勉誠出版、二〇〇八)

〈参照資料〉

倭訓栞前編：架蔵本

倭名抄：東京大学国語研究室蔵本寛文一一年版本

鋸屑譚：静嘉堂文庫蔵谷川士清自筆本

読大日本史私記：国会図書館蔵本(国会図書館デジタル化資料)

濁語考：東京大学国語研究室蔵本

〔本稿は、第一〇七回訓点語学会研究発表会(二〇二二年一〇月二二日 於・東京大学山上会館)の発表原稿の一部に加筆訂正を施したものである。〕

(ひらい あもん 大学院人文社会科学系研究科 博士課程五年)